

「南国フィジーで英語研修と子ども達とふれあうボランティア」(秋澤未央)

GMS学部3年の秋澤未央さんは、春休みを利用して、南太平洋の島国フィジー共和国において、**英語の語学学習と孤児院でのボランティア活動**を行ってきました。

フィジーは、人口85万人(ちなみに、駒澤大学がある東京都世田谷区の人口は、約88万人)余りの南太平洋の島国で、**常夏の気候と綺麗な海**で、観光地として人気があります。

「英語の語学研修でフィジー？」と意外に思う方もいるかもしれませんが、多民族国家フィジーの公用語は英語で、英語が広く使用されています。**のんびりとした南国で英語を勉強したい**、という方にとっては、フィジーはよいオプションの一つと言えるでしょう。

また秋澤さんは、**英語学習の傍ら、地元の孤児院でボランティア活動**を行ってきました。この孤児院での活動はあらかじめ研修プランに組み込まれていたものではなく、秋澤さんが現地で「やりたい」と思い立ち、自分で孤児院に出向いて交渉して許可を得て、ボランティアを行ったというものです。秋澤さんの行動力と交渉力は、さすがという他ありません。

以下は、秋澤さんにお聞きした内容です。



Q1. 海外研修のきっかけは何でしたか？また、なぜたくさんある候補地の中でフィジーに行くことを決めたのですか？

私の所属するゼミでも異文化間コミュニケーションを扱っていて、異文化交流に興味があったということが理由の一つです。しかし最も大きな理由は、海外という普段とは異なる環境に自分をおくことで成長したかったということです。また、もともと途上国に興味があり、更にリゾート地としても有名であることからフィジーに決めました。



Q2. 渡航前の準備として、何かしたことはありますか？

特に準備したというほどのことではないのですが、時間の許す限り、これまで学んだ英語を復習することに努めました。また、フィジーの気候や必要なもの、例えば公共施設ではトイレトペーパーがないため持っていくこと、夜は暗い為懐中電灯が必需品であること、などを調べ準備しました。

さらに、フィジーでのタブー、例えば子どもであっても人の頭をなでることは失礼にあたるのでしてはいけない、などを調べたりしました。

Q3. 今回の研修に費やした費用は、いくらくらいですか？

現地での生活費も含め、大体 30 万円程度です。私の場合、海が好きなため毎週末に離島に遊びに行っていたので、その分余計に予算がかかりました。もし行かなければ、もっと安く済むはずです。途上国なので生活費は何かと安く済みました。

Q4. 現地では、どのようなところに宿泊していたのですか？ また、食事は口に合いましたか？

ホームステイをしていました。食事は、ココナッツを使った料理やキャッサバ（タロイモ）、ライス、ヌードル、庭でとれたバナナ、グアバなど南国のフルーツがよく出ました。全体的に薄味で、日本人の舌に合いとてもおいしかったです





またフィジーはイギリスの植民地であったため、同じくイギリスの植民地であったインドから沢山のインド人が労働力として連れてこられ、彼らの多くはそのままフィジーに定住しています。そのため、街にはインド料理店も多く見られました。その一方で、フィジー系住民は商売ごとにあまり熱心でないせいか、フィジー料理店がないことに驚きました。

Q5. 現地では、どのようなスケジュールで毎日を過ごしていたのですか？

平日は、朝の8時から午後2時半まで学校で英語の授業を受けました。授業後は、教師や留学生によるフィジー伝統のダンスや、演劇などの催し物が行われることがありました。



授業後は、学校の近くにある孤児院にボランティアに行っていました。最初はボランティアを行うことは予定に入っていませんでしたが、孤児院の院長に「ボランティアとして何か出来ることはないか？」と直接交渉しに行ったところ、快く承諾してくださいました。

孤児院では、下は0歳から上は高校生までのフィジー人やインド人の子どもたち総勢20名ほどが生活していました。敷地はあまり広くはありませんでしたが、外壁の周りには子どもたちの描いた色鮮やかでかわいらしい絵が飾られており、孤児院には見えないような佇まいでした。

以前の私は孤児院に対して暗い印象をもち、孤児院の子どもたちに対しては「かわいそう」などという同情に似た気持ちを抱いていました。しかし、明るく活発な子どもたちと鬼ごっこをしたり、ボール遊びをしたり、ブランコをしたりして遊んでいるうちに、そういったステレオタイプ的な見方は払拭されていきました。ただし、さすがにおんぶをしながらの鬼ごっこは体力的につらかったです(笑)。



それ以外には、街に出て買い物をしたり、友達と観光したりして過ごしました。夜は早く就寝するフィジー人の生活に合わせ、午後 10 時～11 時には床につきました。そのため早寝早起きの生活で、日本にいる時よりも非常に健康的な生活を送ることができました。

休日は友達とクルーザーを使って離島に行き、シュノーケリングやカヤック等を楽しみました。



Q6. 一緒にプログラムに参加したクラスメートには、どんな人達がありましたか？

教師はフィジー人で、皆底抜けに明るいためとても楽しく授業を受けることができました。参加者は日本人が多かったのですが、語学学校内では、同じ国出身の留学生同士であっても英語で話すことが義務付けられていたため、英語環境で過ごすことが出来ました。また、数ある国の中からフィジーを選んできた人たちだけあって個性的な人が多かったです。年齢層も下は 17 歳から上は 60 歳近い人までと様々で、夢や志の高い人ばかりでとても影響を受けたのと同時に、こちらの意気も高まるような刺激的な人たちばかりでした。



Q7. 現地での心温まるエピソード等ありますか？

街ですれ違う人みんなが必ず「Bula!」（フィジー語でのあいさつ）とあいさつしてくれ、バスで乗り合わせた人でもすぐに打ち解けられディナーに招いてくれました。更に道に迷っているときには、私の行き先まで一緒についてきて道案内をしてくれたり、本当に優しい人ばかりという印象を受けました。

家に帰ると近所の子どもたちが何人も家の前で私を待っていてくれ、「みお〜」といって駆け寄ってきてくれたり、孤児院では子どもたちが満面の笑みで遊んでくれたりと、心温まるような体験ができました。



Q8. 現地で受けたカルチャーショックは、何かありますか？

日本での生活とあまりにも異なるため、たくさんのカルチャーショックがあったのですが、主要なものを挙げると、

- ① バス停もバスの時刻表もなかったこと。
- ② 日本に比べ、時間の流れがゆっくりであったこと。
- ③ 街ゆく人が、あいさつをしてくれること。
- ④ カバという木の根から採れる泥水のような飲み物を飲んだこと（飲んだ後、舌がしびれるような感覚になる。）。
- ⑤ しばしば断水や停電があること。断水の際は溜まった雨水を使用し、身体を洗う人も

いた。

- ⑥ ホストファミリーが熱心なキリスト教徒で、毎日お祈りをしていたこと。また、自分の身の周りの人、更には私の日本の家族や友人にまでも幸があるようお祈りしてくれたこと。

など、があります。



Q9. 今回の研修は、秋澤さんの大学生生活や今後の人生においてどのように生きてくると思っていますか？

英語だけの生活をしてみて、より一層自身の英語力を上げたい、日本または海外で英語を使って働きたいと思うようになりました。更に、ホストファミリーに日本語や日本の文化を教えることにも楽しさを覚え、より日本のことを知ってもらいたいと思うのと同時に、私自身も母国についてより深く知りたいと思うようになりました。

また、熱心なキリスト教徒であるホストファミリーと生活を共にするにつれ、周りの人や物に対してもっと感謝して生きようと思えるようになりました。「日本」という、物があふれ何不自由なく生きていけるこの国で生きているということに、もっと感謝しなければいけないとも思いました。そしてフィジー人のように明るく、笑顔で、助け合って生きていくことの重要性も今後忘れずにいたいと強く思いました。

フィジーについてポジティブなことばかり述べましたが、フィジーはとても美しく、のどかでいい国である一方、ごみが町のあちこちにあふれていました。私はその光景を見て、途上国のごみ問題解決のために自分がなにかできることがあればしたいな、と今回思うようになりました。

Q10. 最後に、これから海外研修を行いたいと思っている人へのアドバイスやメッセージをお願いします。

海外研修を行いたいという「想い」があるのならば、今すぐにでも行動に移すべきです！私も長年、留学に行こうという意志はあったのですが、なかなか行動に移せず、今ではもっと行っておけばよかったと後悔しています。ですから、考える前にまず、行ってみるこ

とが大切ではないかと思います。語学習得だけを目的とするのではなく、異文化交流や、普段とは違う環境に自己をおき、新たな自分を発見できるのも留学のメリットだと思います。日本と言う小さな島国の中で留まっているのではなく、世界に出てもっと視野を広げて見ると、何か変わるかもしれません。



おわり

(聞き手&文責 GMS学部講師 杉森建太郎)